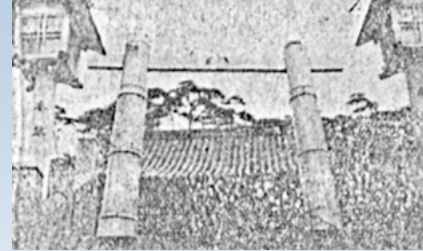




聖行の史冊

# 陶山神社の奉納品 こぼれ話 その二



機関紙に投稿された鳥居の写真。上部が欠損している。

令和2年3月に、陶山神社の磁器製鳥居が磁器製鳥居修復準備委員会によって修復されたことは皆さんの記憶にも新しいかと思えます。ではこの鳥居が、今から60年ほど前にも修復されていたことをご存じでしょうか？ 今号は、昭和32～36年（1957～61）に行われた鳥居の修復について、紹介したいと思います。

そもそもこの鳥居は、明治21年（1888）に神事当番町であった稗古場町が奉納したもので、明治期の有田焼大物制作の技術力の高さを物語る製品のひとつです。

ところが、昭和31年（1956）9月10日の台風12号により、鳥居の上部（笠木・島木）が飛散してしまっただけです。これを受け、翌32年5月29日付け『有田公民館機関紙ARITA』（以下、機関紙）の「郷土の名折れ」という、郷土をよりよくするため、あえて欠点を指摘するコーナーに、「日本一は昔だけですか」というタイトルで、一枚の写真が町民から投稿されました。有田自慢の磁器製鳥居も上部が吹き飛んだまま、これを復元できないようならば有田焼の伝統とは名ばかりではないか、というもので、これには当時の機関紙担当者もぐうの音も出さず「必ず復旧させることをお約束します」と記事を締めくくっています。

それから時は流れて昭和36年8月3日、神社夏祭にあわせて鳥居竣工落成式が行われました。その経緯については、昭和36年7月20日付け機関紙に詳しく書かれています。（黒字部分は原文抜き出し）

まず陶山神社で鳥居修復協議が開催され、北川伊平氏らの「なんとか復元したい」という熱意に押され、「陶山神社本殿横に収容されている鳥居の上部の破片を見

て、泉山石で作られたとみられる鋭い角度に先工の苦勞の跡を偲んだが、幸いなことに一番製作上至難に近い左端の笠木がワレずにいることに、今更ながら神の恩寵だと有難く思われた。それに川崎宝次郎氏から右端の笠木と真ん中に挿入する四ヶの同型のものが製作者の岩尾久吉氏の親戚である森永鶴男氏宅に保存されていることを披露されたので、更に一同ホッとしたものだった。」とあります。しかしその後、陶業界が不景気に陥り、鳥居修復が滞ってしまったところ、「（鳥居について）かねて有田焼の不名誉だと密かに感じていられた（十代）深川（栄左衛門）氏は「そういうことであれば、ナンとか私の会社（香蘭社）の方で造るようになりましょう…」と申出られ、（中略）斯うした各方面から厚い念願が凝集して再三にわたる試作の結果、漸く36年春焼成でき、8月3日陶山神社夏祭当時落成の運びになった。」

記事は、私費を投じた深川氏、先祖の製品を保管し提供した森永氏、有田焼に熱意を傾けた北川氏の三名が、完成を待たずに儂くなられたことを偲び、三氏の靈に感謝を込めて報告したい、と締めくくっています。

三氏に加え、破損した磁器片を大切に保管した陶山神社、問題提起した町民、それを受け止め、解決を模索した町の担当者、苦勞して試作を重ねた製作者など、たくさんの人々の熱意が鳥居修復に込められていました。今も有田町のシンボリックな存在である磁器製鳥居に、このような「熱い」エピソードがあったことを、どうぞみなさんも記憶にとどめておいてください。

（永井）



陶山神社磁器製鳥居上部（笠木・島木部分）  
正面向き  
令和2年3月撮影



# 皿 季刊 山

No.135

# 秋 2022

有田町歴史民俗資料館・館報

# 令和5年度『全国重要無形文化財保持団体協議会 佐賀・有田大会』に向けて～ Vol.7

令和5年度に開催される大会に向けた連載の第7回です。今回は、三重県鈴鹿市の「伊勢型紙」  
とおおいたけん ひ た し  
と大分県日田市の「小鹿田焼」の2団体に、自己紹介をしていただきます。

## 伊勢型紙 伊勢型紙技術保存会

### ○保存会について

昭和38年度（1963）から鈴鹿市が開催してきた伊勢型紙伝承者養成事業の修了者を中心に、平成3年（1991）に組織され、平成5年（1993）に国の重要無形文化財「伊勢型紙」の保持団体として認定されました。

現在では12名の会員が、20名余りの受講生に技術指導を続けています。世代交代の必要に迫られる中、用具・原材料の確保等、様々な問題を抱えていますが、解決に向け粘り強く努力を続けています。

### ○重要無形文化財の指定要件

名称：伊勢型紙

指定：平成5年（1993）4月15日

1. 突彫、錐彫、道具彫、縮彫等の彫刻は、伝統的技法により、手彫であること。
2. 糸入れは、伝統的技法によるか、又はこれに準ずること。
3. 製作用具等の調製は、代々の伝承に準ずること。
4. 型地紙の調製は、伝統的技術により生漉きの楮紙に渋加工を施し自然枯らしとするか、またはこれに準ずること。
5. 型紙の紋様は、古代型紙、小本等の古典的な図柄を参考にした価値の高いものであること。
6. 染型紙製作においては、伝統的な伊勢型紙及び型染の優れた作調、品格等の特質を保持すること。

### ○重要無形文化財の特徴

伊勢型紙は、着物に絵柄を染めるために、型地紙に彫刻刀で様々な紋様を彫りあげたもので、古くから鈴鹿市の白子・寺家両町を中心に発達した伝統工芸です。いつから興ったのかは明らかではありませんが、特に隆盛を極めたのは江戸時代に入ってからです。

伊勢型紙の製作技術には、突彫・錐彫・道具彫・縮彫の4種類の彫刻技法と染色時に型紙がくずれないよう補強する糸入れの技法があります。彫刻に際しては、5～6枚の型地紙を重ねて一度に彫り抜きます。精緻な型紙が大量に必要とされた時代の、知恵と技術の結晶が伊勢型紙です。

### ○重要無形文化財及び保存会の歴史

昭和27年（1952）文化財保護委員会より「江戸小紋伊勢型紙」の技術保存の指定を受ける。

昭和30年（1955）6名が重要無形文化財伊勢型紙技術保持者として認定される。

平成3年（1991）伊勢型紙技術保存会が組織される。

平成4年（1992）三重県指定無形文化財に指定され、伊勢型紙技術保存会が保持団体として認定される。

平成5年（1993）国の重要無形文化財に指定され、伊勢型紙技術保存会が保持団体として認定される。

### ○近年の試み、伝統を守るうえで心がけていることなど

伊勢型紙は非常に精緻な彫刻が施されていますが、切り絵ではなく染色用の型紙になります。そのため、染色に最適化されるとともに、永年の使用にも耐えるものを作製していくことが何より大切です。

これまでも型地紙に関連した調査を実施してきましたが、令和4年度から新たに文化庁の委託を受けて、良質な型地紙のメカニズムの解明に向けた研究を一層推進しています。

型地紙は、伊勢型紙の彫刻職人だけではなく、手漉き和紙職人、柿渋生産者、型地紙加工職人、染色師といった様々な方の手によって作製・使用されているため、これら関係者の協力を得ながら、調査・研究を推進していきます。

### ～用語解説～

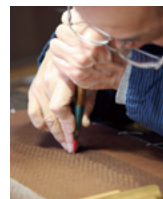
型地紙：型紙彫刻に用いる紙。数枚の和紙を柿渋で貼り合わせたもの。

古代型紙：主に近世から近代にかけて製作された古い型紙を指す。

小本：型紙における図柄の原本。四方にずらしつつ摺り取り、図柄を構成する。



突彫



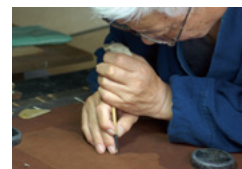
道具彫



縮彫



糸入れ



錐彫

### ○保存会について

「小鹿田焼技術保存会」は、国の重要無形文化財「小鹿田焼」の伝統的な製作技術を純粋に継承し、健全な作調による小鹿田焼を製作するため、その伝統的な製作技術の保存及び向上を図ることを目的として、平成7年に発足しました。現在は、指導講師を兼任する会員9名、伝承者9名で、研修会や勉強会などを通じて、日々小鹿田焼の技術向上に務めております。

### ○重要無形文化財の指定要件

**名称：小鹿田焼**

**指定：平成7年（1995）5月31日**

1. 陶土は、小鹿田皿山で採取された原土を唐臼で粉碎し、手作業で水簸・乾燥させたものとし、単味で使用すること。
2. 成形は蹴轆轤により、大物作りは底打ち、練付、腰継によること。
3. 模様付けでは、伝承された刷毛目、飛び匏、櫛目、指描き、打掛け、流掛け等の技法によること。
4. 釉薬は、フラシ釉（透明釉）、地釉（飴釉）、セイジ（緑釉）、薄セイジ、黒釉、ドーケとし、原料は、木灰、藁灰、長石、錆石、銅とし、調製は伝承された方法により、施釉は、生掛けを基本とすること。
5. 窯焚き（焼成）は伝承された登窯によること。
6. 伝統的な小鹿田焼の作調等の特質を保持すること。

### ○重要無形文化財の特徴

小鹿田焼の陶土は、地元で採取した土を、水力を利用した唐臼で粉碎して作っています。器の成形には、蹴轆轤を用い、白化粧土を塗って刷毛目や飛び匏、櫛目、指描き等による模様を施します。また、使用する釉薬は、木灰や藁灰・長石等、天然の素材を調合しています。器を焼成する際には、薪を燃料とする登り窯を使用します。

自然との共存、自然との距離の近さが、小鹿田焼の特徴です。窯元は、家族単位で構成され、この地に器づくりが伝わった江戸時代から変わらない作陶文化を継承する習慣が今も続いています。

### ○重要無形文化財及び保存会の歴史

小鹿田焼は、桃山時代に渡来した朝鮮人陶工による技術が、筑前高取系の小石原窯を経て、現在の大分県日田市大字鶴河内字皿山に伝えられたものと考えられています。

昭和6年（1931）に柳宗悦が来窯ののち、紀行文「日

田の皿山」を著し、昭和29年（1954）には世界的な陶芸家のバーナード・リーチも来窯しました。この二人の著書などにより小鹿田焼が全国的に知られ、濱田庄司が技術保存の必要を説いたことから、昭和45年（1970）には国の「記録作成の措置を講ずべき無形文化財」に選択されました。その後、平成7年に小鹿田焼は国の重要無形文化財に指定され、その保持団体として小鹿田焼技術保存会も認定されました。

### ○近年の試み、伝統を守るうえで心がけていることなど

現在では、大壺や大甕などの大物の器の需要が減り、需要の多い小物の器の製作が中心になっています。製作機会がなければ技術は衰退してしまうため、保存会では大物の器の製作も積極的に取り入れています。また、これまで採用していなかった地層より新たに土を採取し、器を製作する実験なども行っております。

小鹿田焼が、今後も変わることなく継承されるよう、会員一人ひとりが意見を出し合い、活動しています。

#### ～用語解説～

**底打ち**：底部となる土を轆轤にのせ、手または槌で叩き締める。  
**練付**：土を太い紐状にして轆轤を回しながら、底打ちした土に積み上げる。  
**腰継**：大物制作時、先に胴部を製作し、ある程度乾燥した後、上部を練付けて継ぎ足す。



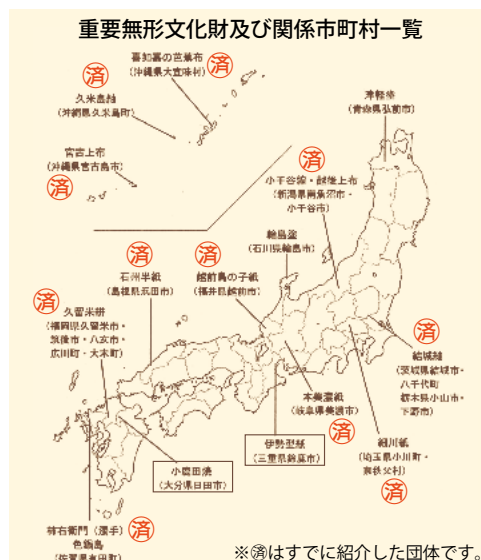
伝承者研修風景



小鹿田焼 甕



天草陶石と木節粘土の調合割合による白化粧土の焼成実験例



※◎はすでに紹介した団体です。



## 資料館の 夏休み子ども向け講座

### 【第9回 歴史の川ざらい～ベンジャラを探そう】

有田の川を眺めると、川底に無数の陶片を見ることができます。これは、川沿いにあった窯跡などから流れ込んだり、捨てられたりしたものです。この講座は、川にある古い陶片を探すことで、有田ならではの風情を体験し、郷土への愛着と誇りを持ってもらおうと願って、毎年夏季に資料館が開催しているものです。今年は8月4日(休)に開催し、11名の子供たちが参加しました。

最初に、資料館で学芸員からやきものことや、どのような陶片を探すのかといった説明を受け、白川川へと移動しました。現地でも、改めて川の中で作業するための注意点を聞き、いざ陶片探しへ。昨年と同様、



上：陶片探索中  
下：陶片鑑定中

見つけた陶片はその場で学芸員が鑑定し、古いものから30・10・5・0点のポイントとなるゲーム形式で行いました。

子供たちは、古い陶片を求めて、ずぶ濡れになりながら、保護者の方々と相談したり、友達と点数を競ったりして楽しんでいました。資料館へ戻り、点数発表と表彰を行いました。今回の最高

得点は110点で、なんと2名もいました。たくさんの古くて特徴ある陶片が発見された今年の川ざらいは、子供たちに参加賞を進呈して、無事に終わりました。

今回発見した陶片は、貴重な文化財であるため持ち帰ることはできませんが、見つけた陶片の中から特徴的な1点を選び、元の形や製作年代等を記した解説シートを作成して、後日届けています。これらの陶片と解説シートは、資料館で毎年開催している企画展で展示し、一般公開する予定です。

### 【第21回 町屋模型作り教室】

去年は、コロナウイルス蔓延と佐賀県内を襲った豪雨が相次いだため、やむなく中止となった模型教室ですが、今年は8月9・10日(火・水)に無事開催することができました。コロナ第7波の真っ只中のためか、参加者は例年に比べて少ない4名だったものの、最終的に、それぞれ個性あふれる町並みができあがりました。

この講座は、実在する建物の約200分の1サイズの模型を作成することにより、有田内山重要伝統的建造物群保存地区(以下、伝建地区)について理解を深め、自分の望む町並みを製作するというものです。まず初めに、実際に伝建地区の一部を歩きながら、担当職員より説明を受け、模型のモデルの一つである旧田代家西洋館では内部まで見学しました。

その後子供たちは、11種類の模型の中から各々好きなものを選び、1軒目を組み立てました。たどたどしかった手付きも、2軒目以降はそつなくなり、初めてとは思えないほど上手になりました。2日目は作った模型を台紙に並べて、道や庭、池や川などを好きなよ

うに加えて、色彩豊かな独創的な町並みが出来上がりました。

この模型教室を通じて、子供たちが有田町の歴史や文化に関心を持ち、郷土へ誇りを持つことを願っています。



完成した町並みの模型と子供たち



## 新ミュージアムグッズ登場!!

### 「職人尽し」

### マスキングテープ

このほど、有田陶磁美術館の新しいミュージアムグッズに、マスキングテープが加わりました。

素材に使用したのは、美術館の看板「染付有田皿山職人尽し絵図大皿」(佐賀県重要文化財)。この大皿には、37名の老若男女が登場し、江戸時代のやきものの製作工程を場面ごとに活写しています。絵図の職人が飛び出した、まさに「職人尽し」なマスキングテープができあがりました。有田ならではの土産品として、または普段使いに、ぜひご利用ください。



販売場所：有田陶磁美術館・有田町歴史民俗資料館  
価 格：400円

## 季刊『皿山』

通巻 135号 (令和4年10月1日)

編集・発行 有田町歴史民俗資料館

〒844-0001 佐賀県西松浦郡有田町泉山一丁目4-1

☎0955-43-2678 FAX0955-43-4185

URL: <http://www.town.arita.lg.jp/main/169.html>